

杏林大学病院におけるCKDチーム医療の実践と効果検証の試み

杏林大学医学部附属病院腎・透析センター

○濱井章 片山満代 平松佐紀子 西川あや子 山田裕信 中山英明 小田浩之
名古屋恵美子 清水英樹 福岡利仁 軽部美穂 有村義宏 要伸也

【はじめに】

当院のチームで行っているCKD予防活動を説明する。個別じんぞう教室について。個別じんぞう教室を開始した経緯は、腎臓内科医師の「外来診察時に十分に説明を行うことが難しい」という一言が始まりであった。看護単位一元化となり、腎臓内科外来業務に透析センターの看護師も参画できるようになった。最初は毎週水曜日のみ外来で行っていたが、現在は外来、入院関係なく透析センターの看護師が随時行っている。時間は約60分とし、当時の対象は血清Cr2以上の患者とその家族であった。年間約100人が参加されている。療法選択を患者が自己決定するための支援ができる。透析導入時のレディネスを良い状態にすることを目的としている。個別じんぞう教室の流れは医師が「じんぞう教室」の依頼をオーダーし、医師より受けた依頼をもとにパンフレットに沿って説明をする。指導が終わったら報告書を作成し、情報共有できるようにしている。集団じんぞう教室は2004年から開始されている。集団腎臓教室は医師・看護師・臨床工学技士・栄養士・ソーシャルワーカー・薬剤師と多職種で行っている。毎回実施前に何度も打ち合わせを行い、季節や旬なトピックスに合わせたテーマを決めてそれぞれの職種の発表内容を検討している。年間延べ150人の参加があり、年3回実施している。市民公開講座は2005年から行っている。社会的にも世界腎臓デーが誕生し、生活習慣病やCKDへの関心が高まりつつあり、当院に通院されている患者だけでなく、通院されていない方にも予防の大切さを知ってもらうために開始した。体験コーナーとしてメタボリック測定や食材フードモデルの展示などがある。また、栄養士や薬剤師、看護師など他職種による「よろず相談」のブースを設けており個別相談ができる。毎年約100人程度の参加がある。その他、2013年より糖尿病透析予防加算指導を開始した。月1回医師、栄養士、看護師でチームカンファレンスを行い現在26名の患者が継続中である。

【目的】 チームの活動がCKD患者の経過に及ぼす効果を検証する

【方法】 過去10年間の計画導入率と緊急導入率を算出した。さらに、2015年度新規透析導入患者を対象に、個別及び集団のじんぞう教室、糖尿病透析予防加算指導を受けた患者と計画導入率の関連について調査した

【結果】 2015年度の実績詳細では新規透析導入数91件。そのうち腎臓内科フォローありが57件、他科、他院からの紹介が34件であった。フォロー患者57件中計画導入は41件(71.9%)であった。その計画導入41件中24件(58.5%)が個別じんぞう教室、集団じんぞう教室、DM透析予防指導のどれかを受けていたことがわかった。

当院における計画導入数の動向では、H17年の計画導入率は45.0%で27年度では71.9%とここ3年は70%を超えている。CKDチームの効果を検証するため、チームの指導介入ありとなしで、計画導入と緊急導入の比較をした。指導ありの群は計画導入率80%で緊急導入率が20%であった。一方指導なしの群は計画導入率が65%、緊急導入率が35%であった。明らかな有意差は認めなかったが、指導ありの群の方が計画導入率が高い傾向にあった。

計画導入と緊急導入における平均在院日数の推移は、緊急導入では2012年と2015年を比較すると、59日から40日と19日の短縮がみられ、計画導入では19日から12日と7日間の短縮がみられた。

【考察】

じんぞう教室を開始してから計画導入数は増加し、ここ数年は計画導入率70%以上を保っている。計画導入患者41件中、24件(58.5%)がCKDチームによる介入を受けていた。また、受けていた群は受けていなかった群より計画導入率が高い傾向にあった。計画導入患者の平均在院日数は緊急導入の患者に比べ大幅に短いことがわかった。さらに、4年前に比べ7日間の短縮がみられた。CKDチームの指導ありの群が計画導入率の高い傾向にあったことから、それが計画導入率の増加、および入院日数の短縮につながっていると考えられる。また、理由の1つとして多職種が介入することで、様々な方面からの情報を得ることができるので患者の透析受け入れ準備状態を促進させていると言える。しかし、CKDの指導を受けた患者は腎臓内科専門外来においても58.5%と必ずしも十分な数字ではなく、介入率を高めていく必要があると考える。

【結語】CKD患者が効果的なチーム医療を受けられるように取り組んでゆきたい。